作品内容について

文:タケヤアケミ（ダンス・パフォーミング アーティスト）

作 品 概 要

この作品は、”死んで、また生き返る、死ぬ”をゲームとして扱った、行為の繰り返しです。身体言語として＜囲む__入る__侵す__溶ける__歪む__曲がる__折れる__振動する__通る__反射する__隠す__包む__重なる__ずれる__剥ぐ__失う__出る__透ける__消える__分割する__分裂する__崩れる__破裂する__拡大する__増殖する__連続する__繋ぐ__結ぶ__絡む__立体化する__暗示する＞の動きの要素で構成。

作品内容は、犯罪／サスペンス事件を通しての人の反応、社会における人の繋がりを風刺的に展開。
シーンは場面ごとに準備されたスコア（進行表）に準じて創作・リハーサルを実施。死に至る事件の発端・過程・原因は、映画や今までの犯罪の歴史の中からリサーチ。そして＜報道／報告＞する、されることを視点に置き、パフォーマー同士が舞台で撮影した映像が流されるという試みを実施します。

作 品 意 図

役を演じるという芝居的な表現ではなく、ハプニングとしての行為とその反応の為の演出を試みる。自分を客観的に距離を於いて眺めた時の、現実の把握、認識、そして他者、社会との関わりを重視します。

創作に関しては、言うまでもなく、SOSは危機状態で我々の魂を救って！というコンセプトが背景にあるので、表現のテーマは危機状態での咄嗟の反応や感情の状態の描写です。特に本能や感覚的な察知がどう働くだろうかなどです。危機状態時になされる生命保持の為の判断と対処、その心の動きを浮き彫りにします。理由があるから、何かが起こったから動くという 行動の必然の原理を探りながら、SOS状態という悲劇の中でも笑う余地がある人間のユーモア性を取り上げていきます。

作 品 設 定

5人のダンサーがステージに横に一列に並んだ状態が基本形で、幾つかの例外があるとしてもこの状態がシーンごとの始まりの配列で進行します。

報道の目・・・舞台にヴィデオカメラか写真カメラを置き、パフォーマーの誰かが、自分達がしでかした事件を時々撮って、それが同時にスクリーンに放映。＊或は観客がそれを撮るというシーンもあります。

演出的にはソロ／個人の存在感の強化:タイミング、攻撃性、緊張と弛緩、空間把握、個人の歴史、共有感、顔、態度、仕草、言葉、自分の声、音との瞬時の選択・相互関係。
なぜ演じるのか、踊るのか？なぜ人前で？どの観客に自分を一番提示したいのか？
そのパワーは何処に向けられるのか？などをキー・センテンスとして創作していきます。
メッセージを孕んだハング性を重視します。実際にスタジオでパフォーマー同士の組み合わせによって生まれる緊張感などをもとに現場の創作で詳細を定義していきます。
ソロ・デュオ・トリオ・グループ内の孤立／連帯／葛藤といった行為へ発展していくまでの演出を組み込んだ構成にします。そこから人との接点から生まれる新たな情況、関係を暴いていきます ― 個人と他人、社会の狭間での自分の状態を確認。

実施場所の今までの事件、犯罪を幾つか取り上げますので、前もってリサーチしておきます。必要な場合は地元の方とコンタクトして調査。犯罪の歴史、事件など。
最終的にシーンにはタイトルと番号が付けられて順を追って演じられます。

振り付け、行為の配置は図形一幾何学的なルールを持って、SOS状態の姿を構図して我々の社会、人間模様等を風刺画風にします。

音に関しては、パフォーマーの声を録音したり、その土地の町のノイズ音を録音したものリソースにするとか、パフォーマーの舞台の声、或は歌でなりたつ簡素な形を構想中。
****

■タケヤアケミ　プロフィール■　現在ウイーン在住。ダンサー、振付家、身体＆声のダンス・パフォーミング アーティスト。1999年、ソロ『drowning fish(溺れる魚)』でオーストリアダンス最優秀賞。声と身体の関連性を重視したパフォーマス作品を独自の表現法で展開。ソロ作品以外に、音楽、写真、ヴィデオ、インスタレーション等とのコラボレーション活動 （グラニュラー・シンセサイズ／映像音響プロジェクト“モーションコントロールーモデル５”’ 94―96年、ウルフ・ラングハインリッヒ／映像・音響作家と“風化”2005年 等）音楽家との共演活動は、呼吸音の変調、テキスト、多種のヴォーカル表現を用いたパフォーマンスを電子音楽家、ノイズ音楽等と共演。（トム・コラ、クリスチャン・フェネス、内橋和久 等）。2009「踊りに行くぜ！！」vol.10にて ソロ作品”触覚”を上演。2010年 の現在進行中の作品は、新作の檸檬シンセサイザー・プロジェクトのパフォーマンス版。 www.akemitakeya.com